



特定非営利活動法人 横断型基幹科学技術研究団体連合 2007 年度定時総会

日時：2007 年 4 月 9 日（月）15:00～15:40

会場：東京大学 山上会館 大会議室（東京都文京区本郷 7-3-1）

1. 開会

2. 議事

- | | |
|---|-------|
| 2-1. 第 1 号議案： 新任役員を選任 | p. 1 |
| 2-2. 第 2 号議案： 2006 年度事業報告および 2007 年度事業計画案 | p. 4 |
| 2-3. 第 3 号議案： 2006 年度収支決算報告および 2007 年度予算案 | p. 19 |

3. 閉会

【併催イベント】

■講演会

13:30～14:40

「ヒトとロボットと小説の未来」

講師： 瀬名 秀明 氏 （SF 作家、東北大学機械系特任教授）

■活動報告会

15:40～16:40

- | | |
|-------------------------------------|--------------|
| (1) 第 2 回横幹連合コンファレンス「異分野をつなぐ知のシナジー」 | 実行委員長：樫木哲夫 氏 |
| (2) 横幹ロードマップ委員会 | 委員長：江尻正員 氏 |
| (3) 会誌「横幹」の創刊（会誌編集委員会） | 委員長：原 辰次 氏 |
| (4) 学としての知の統合委員会 | 委員長：木村英紀 氏 |
| (5) 共生コミュニケーション支援調査研究会 | 主査：井越昌紀 氏 |
| (6) 開発・設計プロセス工学調査研究会 | 主査：林 利弘 氏 |

■懇親会

17:00～18:30

参加費有料（お一人様 3,000 円） ※会場は 1 階ラウンジ

第 1 号議案：新任役員を選任

★印が新任役員候補

役職	#	氏名	所属	備考
理事 (会長)	1	吉川 弘之	産業技術総合研究所	(継続)
理事 (副会長)	1	木村 英紀	理化学研究所	(継続)
理事 (副会長)	2	江尻 正員	元日立製作所	★候補 (再任)
理事	1	鈴木 久敏	筑波大学	(継続)
理事	2	出口 光一郎	東北大学	(継続)
理事	3	藤井 真理子	東京大学	(継続)
理事	4	松永 是	東京農工大学	(継続)
理事	5	長田 洋	東京工業大学	(継続)
理事	6	佐野 昭	慶應義塾大学	(継続)
理事	7	樺木 哲夫	京都大学	(継続)
理事	8	清水 義雄	信州大学	(継続)
理事	9	西村 千秋	東邦大学	(継続)
理事	10	能勢 豊一	大阪工業大学	(継続)
理事	11	矢川 元基	東洋大学	(継続)
理事	1	椿 広計	筑波大学	★候補
理事	2	大熊 和彦	東京工業大学	★候補
理事	3	帯川 利之	東京大学	★候補
理事	4	山崎 憲	日本大学	★候補
理事	6	神田 雄一	東洋大学	★候補
理事	5	廣田 薫	東京工業大学	★候補 (再任)
理事	7	原 辰次	東京大学	★候補 (再任)
理事	8	遠藤 薫	学習院大学	★候補
理事	9	古田 一雄	東京大学	★候補
監事	1	木下 源一郎	中央大学	(継続)
監事	2	木村 忠正	電気通信大学	★候補 (現理事)

新任役員候補の略歴

【理事】

■椿 広計 氏

現 職：筑波大学 大学院 ビジネス科学研究科 教授・国際経営プロフェッショナル専攻長
(併) 情報・システム研究機構 統計数理研究所 特任客員教授・リスク解析戦略研究センター長

専門分野：応用統計学

略 歴：1982 年 東京大学 大学院 工学系研究科 計数工学専攻 修士課程修了
1982 年～1987 年 東京大学 工学部 助手
1987 年～1997 年 慶應義塾大学 理工学部 専任講師
1997 年～2000 年 筑波大学 社会工学系 助教授
2000 年～2004 年 筑波大学 社会工学系 教授
2004 年～現在 筑波大学 大学院 ビジネス科学研究科 教授

■大熊 和彦 氏

現 職：東京工業大学 統合研究院 イノベーションシステム研究センター 特任教授

専門分野：科学技術政策、研究開発マネジメント、政策・研究評価

略 歴：1968 年 3 月 東京大学工学部卒業
1968 年 4 月～1976 年 3 月 東京大学 大学院 工学系研究科在籍
1977 年 3 月 工学博士号取得 (東京大学)
1977 年 5 月～1982 年 7 月 (財)オストランド 主任研究員
1982 年 4 月～1984 年 3 月 (財)未来工学研究所 客員主任研究員
1983 年 12 月～2006 年 3 月 (財)政策科学研究所 主任研究員、主席研究員、研究部長(併任)
2005 年 10 月～ 東京工業大学 特任教授 (2006 年 4 月より専任)

■帯川 利之 氏

現 職：東京大学 生産技術研究所 教授

専門分野：精密工学 (切削加工、研削加工)

略 歴：1980 年 3 月 東京工業大学 大学院 理工学研究科 博士課程終了
2000 年 4 月～2007 年 3 月 東京工業大学 大学院 理工学研究科 機械制御システム専攻 教授
2007 年 4 月～ 東京大学 生産技術研究所 教授
この間、2002 年～2006 年 (社)精密工学会 理事、2006 年～ (社)精密工学会 監事

■山崎 憲 氏

現 職：日本大学 生産工学部 教授

専門分野：電気電子工学、特に音場の可視化と数値シミュレーション、物体の同定シミュレーション、快適な音空間の創造、医用機器の設計シミュレーション等に従事

略 歴：1972 年 日本大学大学院生産工学研究科修士課程電気工学専攻修了
1972 年～ 日本大学に奉職 現在に至る
この間 1989 年～1992 年 英国 University of Southampton 客員研究員
1993 年 岡山大学から工学博士の学位を授与

■神田 雄一 氏

現 職：東洋大学 工学部 教授

専門分野：生産システム工学、プロジェクトマネジメント

略 歴：1984 年 3 月 東洋大学 大学院 機械工学専攻 博士後期課程修了（工学博士）

1971 年 4 月～1991 年 3 月 機械振興協会 技術研究所

1991 年 4 月～1994 年 3 月 東洋大学 工学部 助教授

1994 年 4 月～現在 東洋大学 工学部 教授

2005 年 4 月～2007 年 3 月 プロジェクトマネジメント学会 会長

■遠藤 薫 氏

現 職：学習院大学 法学部 教授

専門分野：社会システム論、社会情報学、メディア論

略 歴：1977 年 東京大学 教養学部 基礎科学科卒業

1993 年 東京工業大学 大学院 理工学研究科 博士課程修了

1993 年 信州大学 人文学部 教授

1996 年 東京工業大学 大学院 社会理工学研究科 助教授

2003 年～ 学習院大学 法学部 教授

2005 年～ 日本社会情報学会 会長

■古田 一雄 氏

現 職：東京大学 大学院 工学系研究科 教授

専門分野：認知システム工学、安全学

略 歴：1981 年 東京大学 工学部 原子力工学科 卒業

1986 年 東京大学 大学院 博士課程修了 工学博士

(財)電力中央研究所 FBR プロジェクトチーム

1987 年 東京大学 工学部 講師

1989 年 東京大学 工学部 助教授

1999 年 東京大学 大学院 新領域創成科学研究科 教授

2004 年～ 東京大学 大学院 工学系研究科 教授

第 2 号議案：事業報告および事業計画案

1. 2006 年度の概況

NPO（特定非営利活動法人）としての実質的な活動初年度であったが、活動には大きな盛り上がりが見られ、充実した 1 年であった。3 月 31 日現在の会員数は前年と変わらず 43 で、日本リアルオプション学会が入会（12 月）し、地域安全学会が退会（3 月）した。

活動面では、内閣府からの調査受託、(財)政策科学研究所からの調査受託、横幹ロードマップ策定活動での経済産業省との連携など、対外的認知度向上が顕著に現れた。また、第 1 回横幹連合総合シンポジウム、ワークショップ、調査研究会企画によるシンポジウムの開催、学としての知の統合委員会の発足、ニュースレター発行の定常化、会誌「横幹」刊行準備の完了なども展開された。

財政面では、内閣府、(財)科学政策研究所からの業務委託、横断型基幹科学技術推進協議会との連携による個別プロジェクトの契約成立などにより、事業収入が拡大し、組織運営の財政基盤安定化に向かって踏み出した。この結果、単年度収支は大幅の黒字となり、事業費比率も 96%に達し、事業費の拡大に比べて管理費用の少なさが際立つ結果となった。しかしながら、改善に寄与した要因は一時的なものが多く、定常化・財政基盤確立への距離は依然として大きい。今後さらなる努力が必要である。

本年度の主要活動は以下の通りである。

- (1) 第 1 回横幹連合総合シンポジウム「統合知の創成と展開を目指して」を開催（12 月）
- (2) 横断型科学技術の本質を考える「学としての知の統合委員会」が発足（7 月）
- (3) 上記の「学としての知の統合委員会」活動の一環として、ワークショップ「横断型科学技術と数学」を開催（10 月）
- (4) 内閣府から「イノベーション戦略に係る知の融合」調査を受託（10 月～2007 年 3 月）
- (5) (財)政策科学研究所から「我が国のシステム技術に関する文献等のレビュー調査」受託
- (6) 会誌「横幹」の発行体制を確立（創刊号発行は 2007 年 4 月）
- (7) 横幹ロードマップ策定活動の開始（2007 年 1 月）
- (8) 複数分野の専門家が連携して問題解決にあたる新たな産学連携体制の運営体制を構築し、横幹技術協議会との連携によって契約第 1 号が成立（～2007 年 3 月）
- (9) 技術シンポジウム「世界をリードする先進的モノづくりを目指して」を開催（開発・設計プロセス工学調査研究会企画、4 月）
- (10) シンポジウム「こころを結ぶ共生時代にむけた技術戦略を探る」を開催（共生コミュニケーション支援調査研究会企画、10 月）
- (11) 第 1 回横幹連合総合シンポジウムを開催。そのなかで、伝統を持つ 4 学会の会長・副会長とのパネル討論「縦と横の連携が新たなイノベーションを拓く」を実施（12 月）

2. 第 1 回横幹連合総合シンポジウム(2006 年度報告)

第 1 回横幹連合総合シンポジウム「統合知の創成と展開を目指して」を、2006 年 12 月 1～2 日の 2 日にわたりキャンパス・イノベーションセンター（東京）にて開催した。第 1 日目は吉川弘之会長の基調講演と伝統的な大規模学会の会長らを招いてのパネル討論、第 2 日目はオーガナイズドセッション（10 セッション、講演 53 件）のプログラム構成で、206 名の参加があった。今後、横幹連合コンファレンスと交互に隔年開催していく予定。

■実行委員会

(敬称略)

実行委員長	佐野 昭	(慶應義塾大学)
委員	遠藤 薫	(学習院大学)
委員 (総務・会計担当)	大森浩充	(慶應義塾大学)
委員	川田誠一	(産業技術大学院大学)

委員	妹尾 大	(東京工業大学)
委員	古田一雄	(東京大学)
委員 (広報担当)	本多 敏	(慶應義塾大学)
委員	松浦 執	(東海大学)
委員	森田 浩	(大阪大学)
委員	安岡善文	(東京大学)
委員	渡辺美智子	(東洋大学)
アドバイザー委員	木村英紀	(理化学研究所)
アドバイザー委員	原 辰次	(東京大学)
アドバイザー委員	千原國宏	(奈良先端科学技術大学院大学)

■参加者内訳

	会員・外	学生	招待	合計
事前申込み	121	29	4	154
当日申込み	43	9	0	52
合計	164	38	4	206

3. 2007年度の方針

2007 年度は、前年度の活動成果を踏まえて、これらをさらに拡大・定着させていくことを最重要点とし、以下の活動を展開していく。

- (1) 横幹連合の掲げる理念を具体的な社会施策に反映させるための活動
- (2) 横幹科学技術の学問体系としての確立に向けた活動体制強化
- (3) 産学連携活動の強化。特に横幹技術協議会との連携・支援の拡大
- (4) 会員学会との対話・連携活動の拡大
- (5) 縦横の連携活動基盤の整備
- (6) 横幹連合活動の社会への浸透拡大

事業名	事業内容	実施 予定 日時	受益対象者 の範囲及び 予定人数
調査研究 事業(1)	第 2 回横幹連合コンファレンス: ・第 1 回コンファレンス、総合シンポジウムの成果をさらに発展させ、多分野のコラボレーションによる、共通の問題への横幹的アプローチ基盤を強化する。 ・今年のテーマは「異分野をつなぐ知のシナジー」	11 月	学界・産業界から広く参加を募る 300 名
調査研究 事業(2)	横幹ロードマップの策定: ・アカデミックロードマップを策定。4 分野に分かれてワーキンググループを組織し、関連する学会が参加して活動する。 ・第 2 回横幹連合コンファレンスで成果を発表する。 ・経済産業省と緊密に連携して進める。	4 月～ 12 月	
調査研究 事業(3)	学としての知の統合委員会: 昨年度に引き続きさらに掘り下げた調査研究を行う。	1 回 / 月	成果は 一般に公表
調査研究 事業(4)	共通プロジェクト: 横幹技術協議会と連携して、企業経営に資する横幹的アプローチ課題を多分野の専門家と企業関係者のチームで研究する。	5 月～ 3 月	産業界の 経営幹部
調査研究 事業(5)	調査研究会: 横幹的アプローチを必要とする共通的社会的課題・産業界の課題を取り上げ、複数分野の専門家によるチームを結成し調査研究を行い、成果を公表する。今年度は 4 つの調査研究会が活動する見込み。	4 月～	報告書・フォーラム等で、 一般に公表
普及啓蒙 事業(1)	会誌「横幹」の発行: 横幹科学技術をさまざまな角度から掘り下げ、また多くの分野の方への理解を深めるため、会誌を刊行する。当面は年 2 回発行。	4 月	一般者
普及啓蒙 事業(2)	横幹技術フォーラム: 主に産業界を対象に、横幹技術の先端研究成果を第一線で活躍する研究者が解説する。また、産学の対話の場としても活用する。	隔月	産業界の 中核技術者
プロジェクト 事業	複数の学問分野にまたがる産学連携の推進: 産業界から提起される横幹的アプローチを必要とする実問題に対して、多分野の専門家からなるチームを編成して解決にあたる。(実費徴収)	随時	一般企業
広報事業 (1)	ホームページ: ホームページを管理運営し、横幹科学技術の解説、イベントの案内、技術討論などを行う。	4 月～	一般者
広報事業 (2)	パンフレット・ニュースレター等による広報: 横幹連合の活動の紹介、各種イベントの周知、広報を行う。	随時	一般者
その他	関連団体との連携事業: 主として横幹技術協議会との連携による普及啓蒙事業を行う。	随時	一般者

4. 委員会(2006 年度報告および 2007 年度計画案)

(1) 企画委員会

■2006 年度の報告

委員長	木村英紀	(理化学研究所、横幹連合副会長)
副委員長	江尻正員	(横幹連合副会長)
委員	佐野 昭	(慶應義塾大学、横幹連合理事)
	林 利弘	(日立製作所、横幹連合理事)
	原 辰次	(東京大学、横幹連合理事)
	藤井真理子	(東京大学、横幹連合理事)
	遠藤 薫	(学習院大学、日本社会情報学会)
	木村忠正	(電気通信大学、日本信頼性学会)
	栗木 哲	(統計数理研究所、日本統計学会)
	神徳徹雄	(産業技術総合研究所、計測自動制御学会)
	高津春雄	(横河電機、計測自動制御学会)
	椿 広計	(筑波大学、応用統計学会)
	山本修一郎	(NTT データ、プロジェクトマネジメント学会)
	井上雄一郎	(横幹連合事務局長)

定期的(隔月)に委員会を開催し、横幹連合の活動理念、長期的な展望に基づく横幹連合の運営方針にかかわる事項について審議を行ってきた。2006 年度は、科学技術にかかわる政策提言を行うことと、「知の統合」の学問的な方法論の確立のための具体的な戦略を軌道に乗せることに注力した。前者については、(1) 内閣府「イノベーション戦略に係る知の融合」調査、(2) 経済産業省の「技術戦略マップ」に対応する異分野融合のロードマッピング、(3) 内閣府 経済社会総合研究所の「イノベーション可視化プロジェクト」に参画すること、が企画委員会のイニシアティブのもとで計画され、現在進行中である。後者については、「学としての知の統合委員会」を理事会直轄の組織としてスタートさせた。また、機械学会など「縦型学会」との連携を強化するための方法もさまざまな形で議論された。これは第 1 回横幹連合総合シンポジウムである程度実現されたが、今後の課題として残されたことも多い。

2006 年度の委員会における主要な討議項目は以下の通り。

第 1 回 (2006 年 5 月 15 日)

- ・第 1 回横幹連合総合シンポジウム、第 2 回横幹連合コンファレンスの開催構想
- ・第 3 期科学技術基本計画の活用、知の統合委員会の発足、会誌の創刊について

第 2 回 (2006 年 7 月 7 日)

- ・「忘れられた科学 — 数学」への対応について
- ・経産省「技術戦略マップ」への対応について

第 3 回 (2006 年 9 月 1 日)

- ・知の統合ワークショップの企画立案
- ・イノベーション戦略に係る知の融合調査への対応について

第 4 回 (2006 年 10 月 30 日)

- ・内閣府経済社会総合研究所への対応
- ・横幹ロードマップへの取り組み

第 5 回 (2006 年 12 月 21 日)

- ・来年度の活動計画、役員体制について

第 6 回 (2007 年 2 月 23 日)

- ・会誌「横幹」発行計画
- ・学としての知の統合委員会の活動状況と今後の予定

■2007 年度の計画

横幹連合の活動理念、運営方針について、タイムリーな検討を行っていく。2007 年度は引き続き下記の課題を重点的に検討したい。

- (1) 知の統合を目指す学としての戦略深化の方策
- (2) 伝統的な大規模学会との連携強化
- (3) 会員学会の視点からの活動内容の検討および活動活性化
- (4) 横幹技術協議会との連携による相乗効果拡大策の検討と推進
- (5) 横幹科学技術を通じた科学技術政策提言機能の強化

(2) 総務・会員委員会

■2006 年度の報告

委員長	出口光一郎	(東北大学、横幹連合理事)
副委員長	松永 是	(東京農工大学、横幹連合理事)
委員	旭岡勝義	(社会インフラ研究センター、横幹連合理事)
	能勢豊一	(大阪工業大学、横幹連合理事)

第 1 回横幹連合総合シンポジウムにあわせて代議員懇談会を開催した。

内閣府、(財)政策科学研究所からの委託業務、横幹技術協議会との連携によるプロジェクト契約といった事業に対し、円滑な事務対応に努めた。

■2007 年度の計画

引き続き、財政基盤の安定化を図り、健全な運営を目指していく。また、第 2 回横幹連合コンファレンス開催にあわせて、会員交流の場の提供を検討したい。

(3) 事業・広報・出版委員会

■2006 年度の報告

委員長	江尻正員	(横幹連合副会長、日本ロボット学会)
副委員長	原 辰次	(東京大学、計測自動制御学会)
委員	福永哲夫	(早稲田大学、日本バイオメカニクス学会)
	清水義雄	(信州大学、日本感性工学会)
	安岡善文	(東京大学、日本リモートセンシング学会)
	西村千秋	(東邦大学、日本バイオフィードバック学会)
	廣田 薫	(東京工業大学、日本知能情報ファジィ学会)
	長田 洋	(東京工業大学、日本品質管理学会)
	佐野 昭	(慶応義塾大学、計測自動制御学会)

第 1 回横幹連合総合シンポジウムを推進・支援するとともに、横幹協議会が主催する横幹技術フォーラムや各委員会が実施する技術シンポジウムなどの事業を側面支援し、横幹連合としての事業の円滑な推進に努力した。また、親しみやすいホームページを目指して改定作業を行うとともに、各種事業の経過や成果をニュースレターにまとめてホームページ上に掲載した。さらに第 1 回横幹連合総合シンポジウムに時期を合わせ、各学会のキャッチフレーズを掲載したパンフレットを改訂発行し、横幹連合の広報に努めた。また、機関誌「横幹」の発刊に向けて議論を深め、創刊号の企画・編集を行った。

1. 横幹事業の推進

総合シンポジウムなどの事業の推進・支援に加え、横幹連合の進むべき将来方向を模索するためにアカデミックロードマップの策定を企画し、その検討体制を整えた。

2. 電子ニュースレターの発行

第 6 号を平成 18 年 6 月、第 7 号を平成 18 年 9 月、第 8 号を平成 18 年 12 月に発行し、それぞれホームページ上で公開した。また、第 9 号は平成 19 年 3 月中に編集を終え、4 月に発行する。これにより、従来不定期だったニュースレター発行を、年 4 回の定常発行へと軌道に乗せることができた。

3. ジャーナル出版

横幹連合の活動のシンボルともなるジャーナルの発刊を目指し、今まで多方面から可能性を検討してきたが、ようやくその準備が整い、本年 4 月に機関誌「横幹」創刊号として出版されることとなった。

■2007 年度の計画

秋の第 2 回横幹連合コンファレンスなど、各種のシンポジウム、フォーラムの開催を推進・支援するとともに、ニュースレターやホームページを通じて討論の結果や成果をタイムリーに広報することにより、横断型基幹科学技術の重要性の啓蒙と横幹連合のビジビリティ向上を計る。

1. 第 2 回横幹コンファレンスの実施

一昨年実施した第 1 回横幹連合コンファレンス（長野）の成功のあとを受け、第 2 回横幹連合コンファレンス（京都）を実施する。会期は 2007 年 11 月 29 日（木）、30 日（金）の 2 日間、京都大学 百周年時計台記念館を会場に、ヒューマンインタフェース学会を幹事学会として実施予定である。すでに実行委員会、プログラム委員会が設置され、活動を始めている。当委員会としてはこれらを側面から強力に支援していく。また、新しく発足したロードマップ委員会を中心に、横幹ロードマップを策定し、その中間成果をこのコンファレンスで議論予定である。

2. 知の活用に関するワークショップの企画推進支援

知の活用を目指したワークショップ、フォーラムを横幹協議会と連携しつつ企画推進する。

3. ホームページ、ニュースレターの充実

ホームページを一般人をも対象とした分かりやすいものへとさらに改定する努力とともに、その英文化に向けた努力を継続する。また、継続して定常的なニュースレターの発行を図る。

4. ジャーナル出版の定常化推進

4 月の創刊号の発行に続き、秋に第 2 号の発行を目指す。今後定常的な活動として定着させるために編集委員会を充実させる。当面は年 2 回、近い将来年 4 回の発行を計画している。最大の課題は出版費用であり、広告料収入の拡大を目指すとともに、暫くは著者からも別刷り代という形で資金協力を仰ぎつつ、定期購読会員等の制度導入なども検討し、定常的な発行を目指す予定である。

(4) 学術・教育・国際委員会

■2006 年度の報告

委員長	(学術) 鈴木久敏	(筑波大学、横幹連合理事)
副委員長	(教育) 佐野 昭	(慶應義塾大学、横幹連合理事)
	(学術) 柳川 堯	(久留米大学、横幹連合理事)
	(教育) 榎木哲夫	(京都大学、横幹連合理事)
	(国際) 松永 是	(東京農工大学、横幹連合理事)

学術、教育、国際の 3 小委員会に分かれて活動した。

1. 学術小委員会

調査研究会の活動支援、会員学会間の交流・調整、横幹技術の学術的定義の明確化と社会への浸透活動、競争的研究資金の確保等を目的とする。

「システム工学とナレッジマネジメントの融合に関する調査研究会」（幹事学会：計測自動制御

学会)、「医薬品インタフェース調査研究会」(幹事学会:日本人間工学会(医療安全研究部会))の設立申請があり、設置を理事会に推薦した。また「分野統合・融合教育及び人材育成に関わる調査研究会」の設置について提案があったが、学術・教育・国際委員会で検討することとした。「共生コミュニケーション支援調査研究会」、「開発・設計プロセス工学調査研究会」から活動終了報告があり、理事会に報告した。

共生コミュニケーション支援調査研究会企画シンポジウム「こころを結ぶ共生時代にむけた技術戦略を探る一人と人、人と人工物をとりもつ共生コミュニケーションとビジネスチャンス」を精密工学会及び日本感性工学会とともに共催した。さらに、「シミュレーションと SQC 調査研究会」企画シンポジウムおよび『第 45 回ビジネスショウ KANSAI2006「経営(学会)フォーラム」』に協賛した。

知の統合ワークショップ「横断型科学技術と数学 - 新たな学問領域の創出に向けて」、第 1 回横幹連合総合シンポジウム「統合知の創成と展開を目指して」の開催を支援した。

2. 教育小委員会

学術・教員・国際委員会で教育を通しての横幹技術の普及と横幹技術教育の振興策を議論した。第 1 回横幹連合総合シンポジウムの企画・実施並びに第 2 回横幹連合コンファレンス(京都)の開催準備に協力した。

3. 国際小委員会

学術・教員・国際委員会で国際連携のあり方を議論し、日独国際ポジウムの可能性を追求した。

■2007 年度の計画

本年度も学術、教育、国際の 3 小委員会に分かれて活動する。

1. 学術小委員会

調査研究会の活動支援、会員学会間の交流・調整、横幹技術の学術的定義の明確化と社会への浸透活動、競争的研究資金の確保等を目的とする。

(ア) 調査研究会の設立申請を受理しその適否を審査し、設立可と判定する申請を理事会に推薦する。その他、調査研究会の活動を支援する。

(イ) 「学として知の統合」委員会の活動を支援する。

(ウ) 表彰規程を整備し、表彰に値する活動を理事会に推薦する。

(エ) 第 2 回横幹連合コンファレンスの運営に側面から協力し、会員学会間の交流を促進する。

(オ) 競争的研究資金の確保等の方策を検討する。

2. 教育小委員会

横幹技術の教育体系を検討し、推奨カリキュラムの試案を提案する。

3. 国際小委員会

横幹連合の国際的認知を高める活動を行う。

(5) 産学連携委員会

■2006 年度の報告

委員長 矢川元基 (東洋大学、横幹連合理事)

副委員長 石原 直 (東京大学、横幹連合理事)

共通 PJ 藤井眞理子 (東京大学、横幹連合理事)

PJ 一括請負特命 江尻正員 (横幹連合副会長)

横幹技術協議会との共催による「横幹技術フォーラム」を 4 回開催した。産業界にとって有益なテーマを取り上げ、横断型のアプローチを提案し、学の取り組みを紹介した。

また、プロジェクト一括請負のための契約制度を整え、これを利用して個別プロジェクト 1 件が成約に至った。

1. 横幹技術フォーラム開催実績

- ・ 第 11 回「安全安心システム実現への挑戦～安全・安心：地震からプラント、航空機まで～」
(2006 年 5 月 16 日)
- ・ 第 12 回「サプライチェーン革新による競争力向上《シリーズ 1》企業の抱える問題」
(2006 年 9 月 19 日)
- ・ 第 13 回「サプライチェーン革新による競争力向上《シリーズ 2》学からの挑戦」
(2006 年 10 月 31 日)
- ・ 第 14 回「通信とその他の関連技術の連携と展望
～ビジネスのキーインフラとしての通信を活かすために～」 (2007 年 2 月 21 日)

■2007 年度の計画

これまで活動を継続するとともに、横幹技術協議会との連携による産学連携活動をさらなる活性化させたい。一括請負制度を活用した個別プロジェクトの契約、横幹技術協議会との共通プロジェクトの活動開始をめざす。

(6) 学としての知の統合委員会

■2006 年度の報告

	吉川弘之	(産業技術総合研究所、横幹連合 会長)
委員長	木村英紀	(理化学研究所、横幹連合 副会長)
	江尻正員	(横幹連合 副会長)
	旭岡勝義	(社会インフラ研究センター、研究・技術計画学会)
数学 WS WG	佐野 昭	(慶應義塾大学、横幹連合 理事)
	椿 広計	(筑波大学、応用統計学会)
	出口光一郎	(東北大学、横幹連合 理事)
	林 利弘	(日立製作所、横幹連合 理事)
数学 WS WG	原 辰次	(東京大学、横幹連合 理事)
数学 WS WG	藤井眞理子	(東京大学、横幹連合 理事)
	山本修一郎	(NTT データ、プロジェクトマネジメント学会)
	木村忠正	(電気通信大学、横幹連合 理事)
数学 WS WG	栗木 哲	(統計数理研究所、日本統計学会)
	神徳徹雄	(産業技術総合研究所、計測自動制御学会)
	高津春雄	(横河電機、計測自動制御学会)
	千原國宏	(奈良先端科学技術大学院大学、横幹連合 監事)
	大森浩充	(慶應義塾大学、計測自動制御学会)
	妹尾 大	(東京工業大学、経営情報学会)
	遠藤 薫	(学習院大学、日本社会情報学会)
	古田一雄	(東京大学、計測自動制御学会)

本委員会は、横幹科学技術を通じた「知の統合」の学問的な基盤を深め、わが国の科学技術に「知の統合」を根付かせるための政策提言を行うことを目的として、理事会直轄の組織として昨年夏に発足した。

今年度は委員の意見を知り、問題の所在を確認するために月 1 回のペースで会合を行い、各委員に講演をお願いした。そのなかでは (1)「人工物観」の重要性、(2) ソフトウェアとハードウェアの交錯した地点における信頼性の問題、(3) コトづくりの具体的なかたち、などが議論された。また、政策科学研究所の報告「忘れられた科学：数学」に対応して、「横幹科学技術と数学に関

するシンポジウム」を開催した。これらの課題は引き続き翌年度でも検討される。

1. 委員会開催実績（委員敬称略）

第1回（2006年8月2日）

- ・講演1：吉川弘之「一般設計学と横幹科学技術」
- ・講演2：出口光一郎「知の統合を議論するための一番大きな枠組み」

第2回（2006年9月1日）

- ・講演1：遠藤 薫「聖なる時計：日本文化の人工物観」
- ・講演2：木村英紀「『第三の科学革命』試論」

第3回（2006年10月3日）

- ・講演1：松浦 執「型から高次元まで、形の知の活用可能性」
- ・講演2：山本修一郎「ITと知の統合について」

第4回（2006年11月14日）

- ・講演1：原 辰次「多分解能動的システム論の構築に向けて」
- ・講演2：木村忠正「Software Reliability」

第5回（2006年12月21日）

- ・講演1：狼 嘉彰 氏（慶應義塾大学）「戦略的システムエンジニアリング」
- ・講演2：菅村 昇 氏（工学院大学）「ヒューマンエラー」

第6回（2007年2月17日）

- ・講演1：古田 一雄「安全研究における知の統合化」
- ・講演2：出口 光一郎「機械・ロボット分野の研究者が考えている知の統合」

第7回（2007年3月30日）

- ・講演1：廣瀬 和子 氏（上智大学）「人間活動が作る社会の複雑性・階層性とその統合の論理を求めて：システムと行動概念から、行動システムへ」
- ・講演2：木村 英紀「還元的知の統合と生成的知の統合」

2. ワークショップ開催実績（委員敬称略）

知の統合ワークショップ「横断型科学技術と数学 — 新たな学問領域の創出に向けて」

（2006年10月23日、キャンパスイノベーションセンター 国際会議室、参加91名）

全体司会：藤井真理子、パネル討論司会：原 辰次

- ・講演「数学の言葉づくり」小島定吉 氏（東京工業大学）
- ・講演「科学を統合する数理科学 — 情報と生命を見据えて」甘利俊一 氏（理化学研究所）
- ・講演「制御 — 技術の生み出した科学」木村英紀
- ・講演「新しい科学の文法を目指して — 統計科学の立場から —」北川源四郎 氏
（統計数理研究所）
- ・講演「数(理科)学研究の推進は諸科学発展の要となるか」伊藤裕子 氏（科学技術政策研究所）
- ・パネル討論「横断型基幹科学と数学」

■2007年度の計画

2007年度は、前年度の成果に基づき、さらに知の統合の学としての深化を目指して検討を進め、その成果を出版などを通じて対外的に発信して行きたい。

(7) 横幹ロードマップ委員会

■2006年度の報告

委員長	江尻正員	（横幹連合副会長）
幹事	神徳徹雄	（産業技術総合研究所）
幹事	高橋正人	（情報通信研究機構）
事務局	井上雄一郎	（横幹連合事務局長）

WG1	幹事学会	計測自動制御学会	三平満司	(東京工業大学)
	協力学会	システム制御情報学会	杉本謙二	(奈良先端大)
		日本経営工学会	松井正之	(電気通信大学)
		日本統計学会	田村義保	(統計数理研究所)
		日本人間工学会	藤田祐志	(テクノバ)
		リアルオブション学会	高森 寛	(早稲田大学)
		日本経営システム学会	高橋 進	(東海大学)
		日本バイオフィードバック学会	西村千秋	(東邦大学)
		日本オペレーションズ・リサーチ学会	香田正人	(筑波大学)
WG2	幹事学会	日本シミュレーション学会	山崎 憲	(日本大学)
	協力学会	可視化情報学会	小山田耕二	(京都大学)
		可視化情報学会	宮地英生	(ケイ・ジー・ティー)
		国際数理科学協会	高橋 涉	(東京工業大学)
		日本計算工学会	山田貴博	(横浜国立大学)
		日本リモートセンシング学会	笠 博義	(ハザマ)
		応用統計学会	鎌倉稔成	(中央大学)
		日本コンピュータ化学会	長嶋雲兵	(産業技術総合研究所)
		プロジェクトマネジメント学会	木野泰伸	(筑波大学)
日本信頼性学会	山本正宣	(シグナルコンサルタント)		
WG3	幹事学会	ヒューマンインタフェース学会	榎木哲夫	(京都大学)
	協力学会	ヒューマンインタフェース学会	中川正樹	(東京農工大学)
		情報文化学会	岡谷 大	(東京農工大学)
		オフィスオートメーション学会	村田 潔	(明治大学)
		日本行動計量学会	今泉 忠	(多摩大学)
		日本感性工学会	清水義雄	(信州大学)
		日本バイオメカニクス学会	阿江通良	(筑波大学)
		日本デザイン学会	山中敏正	(筑波大学)
		日本知能情報ファジィ学会	菊池浩明	(東海大学)
日本バーチャルリアリティ学会	武田博直	(セガ)		
	形の科学会	岩田修一	(東京大学)	
WG4	幹事学会	精密工学会	鈴木宏正	(東京大学)
	協力学会	国際数理科学協会	木下佳樹	(産業技術総合研究所)
		スケジューリング学会	中野一夫	(構造計画研究所)

経済産業省では重点 24 分野についての「技術戦略マップ」を作成した。また、学会にもアカデミックロードマップ作成を呼びかけ、まずは機械、化学、応用物理の 3 学会とロボット分野（日本ロボット学会、人工知能学会、日本人間工学会の連携）についてロードマップを作成中である。同省には、縦割りの技術だけでは不完全で、技術の組合せや融合が新しいものを生み出すとの基本認識があり、技術融合・知の統合を標榜する当横幹連合に掛ける期待は大きい。横断型科学技術の重要性の高まりと経産省からの期待を受け、横幹連合では本委員会を組織し、自主的にアカデミックロードマップを作ることにした。

- ・WG1 制御・管理技術が先導する未来社会
- ・WG2 シミュレーション技術が先導する未来社会
- ・WG3 ヒューマンインタフェースの革新による新社会の創生
- ・WG4 ものづくりの視点からみた未来社会の構築

上記の4つのWGを設定し、各会員学会に呼びかけ、趣旨・計画概要の説明と委員の人選を依頼した。多くの賛同が得られたので、経済産業省 産業技術環境局 研究開発課の安永課長、福田係長の出席を得て、第1回全体会議（キックオフ）を開催し（1月）、考え方や進め方の統一を図った。その後、WG1～WG3の主査とともに経産省を訪問し（2月）、渡邊企画官らと進め方や問題点について自由討論を行った。WG4については、幹事学会（精密工学会）が別途作成中のロードマップの完成後、それを土台に横幹としてのロードマップ化を進めることとした。各WGの主査がそれぞれ中心となり、各WGが自主的に取り組んでいる。

■2007年度の計画

各学会に、芯となるロードマップがあり、それが定期的に保守され、アップデートされるという形が、今後の学会の正常な形として認識されるようになる可能性もある。そのため、そういう努力をしてみることは有意義であろうと思われる。とくにいくつかの学会が協力して議論する過程で、学会間の会話が成り立ち、知の統合の一助にもなるのではないかと期待される。一般に、出来上がるロードマップよりもその過程であるロードマッピングの方が価値が高いとも言われていること、また、アカデミックなロードマップではあっても、とくに、新産業創造や国際競争力強化のために必要技術を絞込んでその技術目標を立てたいという経産省の思惑があること、などを念頭に、骨組み的なものの作成に、引き続き取り組む。

具体的には、9月末にとりまとめ、第2回横幹連合コンファレンス（11月、京都）での発表計画を検討する。

6. 調査研究会(2006 年度報告および 2007 年度計画案)

(1) シミュレーションと SQC 調査研究会

■2006 年度の報告

設置期間	2004 年 12 月～	
幹事学会	日本品質管理学会	
主査	高橋 朗	(デンソー、日本品質管理学会) 2006 年 8 月逝去
幹事	椿 広計	(筑波大学、日本品質管理学会、応用統計学会)
分科会主査	仁科 健	(名古屋工業大学、日本品質管理学会)
分科会主査	山田 秀	(筑波大学、日本品質管理学会)
分科会主査	天坂 格郎	(青山学院大学、日本品質管理学会)

1. シミュレーションと SQC に関わる調査研究

本調査研究会は、日本品質管理学会が組織した拡大計画研究会「シミュレーションと SQC」で実施される研究に必要な横幹専門科学技術を横幹連合会員学会と議論するために、「CAE における品質保証体系確立」「研究ニーズ探索」「課題解決」の 3 分科会が産学連携の研究活動を行ってきた。

2. 研究会の実施

名古屋(研究ニーズ探索)・東京(品質保証体系、課題解決)で毎月それぞれ 1 回の研究会を開催し、CAE を支援する SQC (統計的品質管理) 技術ならびにそれを支援する情報システムのあり方を検討してきた。2006 年 10 月をもって「研究ニーズ探索」分科会は活動を終了した。2006 年 9 月には、日本品質管理学会主催で当該テーマについての研究集会も行った。日野自動車などの協力を受けてボルト締結部破損の実実験とシミュレーションとの比較検証を進めているところである。

3. 出版の検討

論文集については最終校正作業まで進んでいる。

■2007 年度の計画

1. シミュレーション支援 SQC 技術開発に関する調査研究

2007 年度は、SQC とシミュレーションとを融合した課題解決技術を提示するとともに、ボルト締結部破損を例に必要なソフトウェアについての概念設計なども行う。

2. シンポジウム・出版などの実施

2007 年 11 月の第 2 回横幹連合コンファレンスなどで、本研究活動についてのセッションを開催する。これまでの研究成果については、日本品質管理学会誌にも報告する。

(2) 開発・設計プロセス工学調査研究会

■2006 年度の報告

設置期間	2003 年 11 月～2007 年 3 月 (終了)	
幹事学会	スケジューリング学会	
主査	林 利弘	(日立製作所、横幹連合理事)
副主査	藤本英雄	(名古屋工業大学、スケジューリング学会)
幹事	井上 健	(横河電機)
委員	大藤 正	(玉川大学)
	坂井佐千穂	(セイコーエプソン)
	坂本直史	(ルネサスソリューションズ)
	館野寿丈	(東京都立大学)
	立林和夫	(富士ゼロックス)

中川 徹	(大阪学院大学)
西 康晴	(電気通信大学)
浜谷雅秀	(キヤノン)
福士敬吾	(日産自動車)
藤田喜久雄	(大阪大学)
松田光栄	(パナソニック コミュニケーションズ)
吉村真人	(日立製作所)
米倉清治	(日立製作所)
吉田康彦	(サイテック)
山本節雄	(インターデザイン・テクノロジー)
鈴木惣一	(三菱重工業)
村田朋美	(北九州市立大学)
水谷直美	(スケジューリング学会 事務局)

活動最終年度である 2006 年度は、これまでの活動のとりまとめを行った。企業や大学・研究所等で個別的に研究・開発・実務適用の行われている、開発・設計プロセス工学技術とカテゴリー化できる各種技術を横断的かつ俯瞰的に整頓して眺め、相互の連関の明確化と個々の価値の再認識を行うとともに、それらのシナジー活用を図るための活用法や必要な技術の研究開発および個々の技術の一層の価値向上を図るための諸活動を行い、わが国の技術・製品競争力強化に資するための活動に取り組んだ。

1. 第 2 回技術シンポジウムの開催

2004 年度 (2005 年 1 月) に開催した技術シンポジウムの第 2 回を、4 月 17 日に開催した。テーマを「世界をリードする先進的モノづくりを目指して(2)」とし、TRIZ と DE (デジタルエンジニアリング) に焦点を当て、講演とパネル討論を行い、議論を深めた。

(3) 横断型基幹科学教育に関する調査研究会

■2006 年度の報告

活動休止中。

横断型基幹科学技術はまだ実態が明確になっておらず、政策提言プログラム「横断型科学技術の役割とその推進」教育 WG での活動を継続し、学部・大学院での横断型基幹科学技術者教育の内容を具体化すること、ならびに、JABEE の認定基準を視野に入れつつ将来的に技術者教育の一つの標準となる横断型基幹科学技術者教育カリキュラム構成を検討することを目的として、設置が理事会で承認されている。

(4) 共生コミュニケーション支援調査研究会

■2006 年度の報告

設置期間	2005 年 4 月～2007 年 3 月 (終了)	
幹事学会	精密工学会	
主査	井越昌紀	(東京都立大学、精密工学会)
副主査	伊福部 達	(東京大学、日本バーチャルリアリティ学会)
幹事	下村芳樹	(首都大学東京、精密工学会)
幹事	岡谷 大	(東京農工大学、情報文化学会)
委員	大倉典子	(芝浦工業大学、日本バーチャルリアリティ学会)
	岡本孝司	(東京大学、可視化情報学会)
	加藤俊一	(中央大学、日本感性工学会)
	佐野明人	(名古屋工業大学、日本ロボット学会)

出口光一郎	(東北大学、横幹連合理事)
土井美和子	(東芝、ヒューマンインタフェース学会)
松浦 執	(東海大学、形の科学会)
松元明弘	(東洋大学、精密工学会)

大量で多様化する人工物に囲まれる時代にあつて、共生コミュニケーションに関連する分野のキーワードを調査し、それらの共通事項や関連事項を見出すことにより、人間中心の共生の時代を作るためには、どのような視点で共生コミュニケーションを考えたらよいか、理工学、文化情報学、認知心理学、などの多様な専門領域をどのように結びつければ良いかを考察し、提言としてまとめることを目的とする。本年度は昨年度の調査研究に引き続き、

1. 共生コミュニケーションのスキームの検討
2. 学会間やキーワード間の関係を見るネットワークグラフ WG 設置による研究
3. シンポジウム「こころを結ぶ共生時代にむけた技術戦略を探る」の開催
4. 第2次アンケート調査
5. 提言内容の検討
6. 2年間の活動成果報告書の作成を行った。

(5) リスクの計量化・可視化調査研究会

■2006 年度の報告

設置期間	2005 年 4 月～2007 年 3 月 (終了)	
幹事学会	研究・技術計画学会	
主査	旭岡勝義	(社会インフラ研究センター、横幹連合理事)
副主査	宮本英治	(システムソフト、地域安全学会)
幹事	小俣 透	(東京工業大学、日本シミュレーション学会)
委員	高橋 一	(一橋大学、日本統計学会)
	武田 洋	(法政大学、日本計算工学会)
	田中周二	(ニッセイ基礎研究所、日本応用数理学会)
	水野眞治	(東京工業大学、日本オペレーションズ・リサーチ学会)
	出口光一郎	(東北大学、オブザーバ)

リスクの重点分野に関し、計量化可視化のための基本的な条件設定を研究し、試行的なシミュレーションモデルの条件整備に取り組んだ。また関係する組織との連携を強化し、横断型基幹科学技術として、何を強化整備すべきかを検討した。

1. リスク計量化可視化の調査研究

重点分野別の計量化・可視化のシミュレーションを含めた現状調査及び新たな計量化・可視化技術の展開状況を把握し、問題点を調査研究するとともに、新たな条件選定の基本モデルの予備的な研究をした。

2. リスク計量化可視化の実施

要素技術として何を準備し、計量化・可視化の問題と解決方法を探りながら、新たな条件を付加した体系化を行うことを目指した。また関連学会の拡大やキーマンの登録等今後の議論の深めの条件整備を目標とした。

3. リスク計量化・可視化の準備検討

重点分野の計量化・可視化の要素技術分析を行い、横断型基幹科学技術としてのシミュレーションを含めた計量化・可視化の予備的な考えを整理し、モデルや対策体系との関連を明確化することを目指したが、十分な結論を得るまでには至らなかった。

(6) ステム工学とナレッジマネジメントの融合に関する調査研究会

■2006 年度の報告

設置期間	2006 年 4 月 ～2008 年 3 月	
幹事学会	計測自動制御学会	
主査	中森義輝	(北陸先端科学技術大学院、計測自動制御学会)
副主査	薦田憲久	(大阪大学、電気学会)
幹事	小坂満隆	(日立製作所、計測自動制御学会)
委員	舩橋誠寿	(日立製作所、計測自動制御学会)
	松尾博文	(神戸大学、日本オペレーションズ・リサーチ学会)
	辻 洋	(大阪府立大学、システム制御情報学会)

システム構造化や目的達成のための問題の構造化に優れているシステム工学的なアプローチと、人間の創造活動を活性化する知識マネジメント的なアプローチを融合することで、実社会に存在する複雑な問題の解決を目指したフレームワーク構築を行う。また、この中でモデリング、シミュレーションの活用を行い、企業経営の諸問題の解決、新事業創生の課題解決など、システム工学の新たな応用領域の確立を狙う。これらを目的として設置された本調査研究会では、本年度は 2 回の会合を開催し、活発な討論を行った。

■2007 年度の計画

本年度のおもな活動予定は次の通り。

- (1) 2 回の公開会合 (6 月 電気学会研究会、11 月 第 2 回横幹連合コンファレンス・オーガナイズドセッション) を開催して、これまでの考察を展開する。
- (2) 2008 年 3 月頃に成果報告をとりまとめる。

(7) 医薬品インタフェース調査研究会

■2007 年度の計画

設置期間	2007 年 4 月～2009 年 3 月	
幹事学会	日本人間工学会 (医療安全研究部会)	
主査	土屋文人	(東京医科歯科大学歯学部附属病院、日本人間工学会)
副主査	大倉典子	(芝浦工業大学、日本バーチャルリアリティ学会)
幹事	木村昌臣	(芝浦工業大学、日本人間工学会)
委員	青木和夫	(日本大学、日本人間工学会)
	小松原明哲	(早稲田大学、ヒューマンインタフェース学会)
	三林洋介	(東京都立産業技術高等専門学校、日本人間工学会)
オブザーバ	古川裕之	(金沢大学医学部附属病院 (日本医療情報学会、医療の質・安全学会、日本医療薬学会))

平成 11 年 1 月 11 日に起きた手術患者取り違い事故を契機とし、日本における医療事故防止への取組みが本格的に始まった。以来、厚生労働省主導による各種報告制度や警告制度の整備が進んでいるが、医薬品や医療関係者による検討だけでは、医療事故の防止に効果的な医薬品の表示の指針を明確にすることは難しい。そこで本調査研究会では、人間工学やインタフェース、さらに横幹連合の各学会から広範囲の知恵を集め、この問題に取組み、医薬品の表示の指針の策定に寄与する。本年度のおもな活動予定は次の通り。

- (1) 2007 年 7 月に北京で開催される HCI International 2007 においてオーガナイズドセッション “Safety of medication usage” を設け、各委員のこれまでの活動の成果を一般に公開する。
- (2) 2007 年 11 月に開催される第 2 回横幹連合コンファレンスにおいて、オーガナイズドセッションを設け、本調査研究会の活動の成果を一般に公開する。

平成 18 (2006) 年度 横幹連合 収支計算書 (4月1日～3月31日)

(単位：円)

収入の部

科 目	予 算 額	実績額	差異	消化率	備 考
1. 会費収入	2,530,000	2,525,000	5,000	99.8%	
2. 民間補助金	200,000	1,668,558	▲ 1,468,558	834.3%	計測自動制御学会基金¥1.3M+, カシオ科学財団¥300K
3. 繰越金	2,481,641	2,481,641	0	100.0%	
4. 事業収入	18,000,000	24,114,900	▲ 6,114,900	134.0%	
5. 繰入金収入	0	0	0		
6. 雑収入	0	2,207	▲ 2,207		
収入合計 (A)	23,211,641	30,792,306	▲ 7,580,665	132.7%	

支出の部

科 目	予 算 額	実績額	差異	消化率	備 考
1. 管理費					
1.1 会議費	100,000	118,540	▲ 18,540	118.5%	
1.2 印刷製本費	20,000	25,956	▲ 5,956	129.8%	総会配付資料コピー
1.3 通信運搬費	60,000	45,284	14,716	75.5%	サーバレンタル料等
1.4 旅費交通費	10,000	0	10,000	0.0%	
1.5 人件費	1,000,000	414,790	585,210	41.5%	補助者不採用
1.6 消耗品・備品費	50,000	312,244	▲ 262,244	624.5%	書庫等
1.7 租税公課	30,000	0	30,000	0.0%	住民税(減免)
1.8 雑費	100,000	1,800	98,200	1.8%	
小計	1,370,000	918,614	451,386	67.1%	
2. 事業費					
2.1 第1回横幹連合総合シンポジウム	300,000	1,051,659	▲ 751,659	350.6%	実質¥+300,000
2.2 第2回技術シンポジウム	0	821,079	▲ 821,079		実質¥+100,000
2.3 横幹技術フォーラム	0	0	0	0.0%	横幹技術協議会経費で実施
2.4 学としての知の統合委員会	300,000	343,896	▲ 43,896	114.6%	数学 WS 開催費を含む
2.5 調査研究会	920,265	461,439	458,826	50.1%	実発生分のみ
2.6 受託事業	13,500,000	8,787,950	4,712,050	65.1%	内閣府および政策科学研究所
2.7 プロジェクト請負活動	2,700,000	9,155,500	▲ 6,455,500	339.1%	
2.8 広報費	300,000	118,890	181,110	39.6%	他に引当金¥97,650 充当
2.9 ロードマップ		344,546			予算外
2.10 その他	1,400,000	14,735	1,385,265	1.1%	
小計	19,420,265	21,099,694	▲ 1,679,429	108.6%	
3. 予備費					
3.1 予備費	2,421,376	0	2,421,376	0.0%	
小計	2,421,376	0	2,421,376	0.0%	
支出合計 (B)	23,211,641	22,018,308	1,193,333	94.9%	
収支差額 (A - B)	0	8,773,998			

平成 18(2006)年度貸借対照表

平成 19(2006)年 3 月 31 日現在

(単位:円)

科目	金 額		
I. 資産の部			
1. 流動資産			
現金	43,766		
預 金	10,901,136		
未 収 金	10,085,500		
立 替 払	57,455		
仮 払 金	0		
流動資産合計		21,087,857	
2. 固定資産			
什器備品	0		
基 金	0		
固定資産合計		0	
資産合計			21,087,857
II. 負債の部			
1. 流動負債			
未 払 金	10,913,859		
前 受 金	0		
預 り 金	0		
借入金	0		
仮 受 金	0		
引 当 金	1,400,000		
流動負債合計		12,313,859	
2. 固定負債			
		0	
負債合計			12,313,859
III. 正味財産の部			
正味財産			8,773,998
負債および正味財産合計			21,087,857

監 査 報 告 書

特定非営利活動法人 横断型基幹科学技術研究団体連合の平成 18 年 4 月 1 日から平成 19 年 3 月 31 日にいたる会計年度の収支明細と現預金残高について書類に基づき会計監査を行った結果、適正に会計処理されており、別紙収支計算書および現預金残高は事実と相違ないことを確認しました。

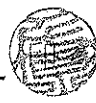
また、同年度の理事会に出席して業務監査を行い、理事会の議事運営が規約に則り適正に行われていたことを確認しました。

横断型基幹科学技術研究団体連合の監査結果を以上のとおり、監事として署名・押印して報告します。

平成 19 年 4 月 9 日

特定非営利活動法人 横断型基幹科学技術研究団体連合

監事

千原國宏 

(千原國宏)

平成 18 年度横幹連合会計 利益処分案

平成 18 年度収支差額 ￥ 8, 7 7 3, 9 9 8

利益処分案

1. 会誌拡充基金を創設 ￥ 1, 0 0 0, 0 0 0

2. 平成 19 年度会計へ繰越 ￥ 7, 7 7 3, 9 9 8

以上

平成 19 (2007) 年度横幹連合予算(案)

(単位：円)

収入の部

科 目	予 算 額	前年度実績額	対前年度実績差異	備 考
1. 会費収入	2,510,000	2,525,000	▲ 15,000	会員構成変動
2. 民間補助金	300,000	1,668,558	▲ 1,368,558	
3. 繰越金	7,773,998	2,481,641	5,292,357	
4. 事業収入	9,500,000	24,114,900	▲ 14,614,900	
受託事業	5,000,000			
プロジェクト	2,000,000			
参加費	1,500,000			
会誌	1,000,000			
5. 繰入金収入	0	0	0	
6. 雑収入	0	2,207	▲ 2,207	
収入合計 (A)	29,583,998	30,792,306	▲ 1,208,308	

支出の部

科 目	予 算 額	前年度実績額	対前年度実績差異	備 考
1. 管理費				
1.1 会議費	150,000	118,540	31,460	総会特別講演演謝金含む
1.2 印刷製本費	30,000	25,956	4,044	
1.3 通信運搬費	50,000	45,284	4,716	
1.4 旅費交通費	100,000	0	100,000	
1.5 人件費	3,500,000	414,790	3,085,210	協議会負担正常化、パート職員補強
1.6 消耗品・備品費	50,000	312,244	▲ 262,244	
1.7 租税公課	0	0	0	
1.8 雑費	100,000	1,800	98,200	住民税均等割は減免、消費税は今年度未該当
小計	3,980,000	918,614	3,061,386	
2. 事業費				
2.1 第2回横幹連合コンファレンス	1,500,000	1,051,659	448,341	実質経費¥300,000
2.2 技術シンポジウム	500,000	821,079	▲ 321,079	実質経費¥0
2.3 横幹技術フォーラム	0	0	0	経費は横幹技術協議会負担
2.4 学としての知の統合委員会	200,000	343,896	▲ 143,896	
2.5 調査研究会	600,000	461,439	138,561	
2.6 受託事業	4,000,000	8,787,950	▲ 4,787,950	10万円/研究会*5+前年繰越分
2.7 プロジェクト請負活動	1,700,000	9,155,500	▲ 7,455,500	横幹技術協議会との連携活動
2.8 広報費	200,000	118,890	81,110	
2.9 ロードマップ	800,000	344,546	455,454	
2.10 会誌「横幹」	1,600,000	0	1,600,000	10万円/WG*3+共通経費
2.11 その他	1,000,000	14,735	985,265	実質経費¥600,000
小計	12,100,000	21,099,694	▲ 8,999,694	
3. 予備費				
3.1 予備費	13,503,998		13,503,998	
小計	13,503,998	310,000	13,193,998	
支出合計 (B)	29,583,998	22,018,308	7,565,690	
収支差額 (A - B)	0	8,773,998		